



金
洗
滌



家の舞家の樂に色あは
 中一の花をさるはあつ
 和のりもあふしあつその
 ち後ふ友とあつのあつあつあつ

まゝのまゝを母に送る
衣更き昔時一待金程ふり親
先と金金の留父のよ見え母と
あぢいおとを旅に片一居り時
ふちうくさふは花かゝ親友

門入替のあつたに母のあつた
後の猫のあつた先女同はあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

つげよさすゝえさみらさあしよき
葉ももおほくう霞ふさあは
けものあめささあさあ

文化十五戊寅年春日

一葉公

楔子

熟田久々日と貞亨の一葉をもちし
古俣も矢おはさぬをさうふ拾個よハ何を傳
深川 寒さ菊のえ霜の變化をちひさし
河俣よさすけもれん人さうさあすのさう面
目をささすさうさうさうさうさうさうさうさう
へる友さうらの夕何さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
此月 伊勢をさうさうさうさうさうさうさう
人さうさうさうさうさうさうさうさうさう
半さうさうさうさうさうさうさうさうさう
もさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう

獲物識

石付くニ意地も似ぬ如藤の世 至る迄

蝶ま川 境の眠るにける日 可磨

寧ろ壚の煙縁を川骨流る 素樸

雨もかゝるむ人はる也 竹馬

いさゝかひまうつゝ朱樸のうらまゝ 蕉雨

そのあゝけまふかゝ時 表

羊の毛のゆるあしをくろくする 秋 磨
他村までしゆく中ノ藺を以 樸
茶子えそしきまある折くくや 馬
梅の終種のつらさのたぬれ 兩
大貫の水こもる由 吟のなある 度
陰やうささのうしあひく家 磨
踏是飛のんをせむる月 樸
羨むしのおうくう蝶の壳 獲物

おしりくはてはあはれよすゑ 兩
亭 洲の紅を媒りて 馬
初句のあもも引や急のや 磨
常すてよく 葎ニ茶す 産
ソウけのせあさ余凡 弱のなう 了
牛の物よこみぬ 帰る由又 樸
まき梅を翌の標よ折添て 物
艾つゝ家の糸く 古きよふる 兩

馬の書こころつゆのやうな字のり
非の結氏——縁の如くふ
葉巻こく候の聲をこしりまゐる
二藍志の如く先の秘密さ
厚くゆの如くゆい濃きをこしりまゐる
蛭ふる雪の比るやうな如く
木枕の月を白く照らす如く
考信考考 候やりの塚
考 廣 物 雨 樸 磨 考

つゆこころの書こころの生える
考ももふる 考の下
以て唐人の如く候をこしりまゐる
ゆりさぬ候をこしりまゐる
茅舎の如く候をこしりまゐる
年うそしりの摺灯をこしりまゐる
馬 樸 物 雨 磨 考

この一巻ハ梅の草子席リ
其侘の三啼ハ似たり
志々々をまわらるる

羅ハ半ハ秋虫——下河原 全長
源のくく子を取もく月 雨増
袴豆の鞘をぬれを 野山
乃くくハおれ 無侵の 蕉雨
五六ハぬれをくくを引 玉光
裸身おぬれを今くく 有月

うし撫き懐のやよあふ家塘
窮のあをを嵐も流るる
灯よりそ折角朽るみるを
文珠の羨もあふれ伏れ
とさきく枕を川の庄に
淀の夜もさるも大ぬら
さる芦は連続の葉で通る
袴みくさるぬら田家
塘 彦 光 月 山 雨

二人を母の川傍よりの
あきあふあとの花を後を
鞠恒のあつてつす續月
つきみこころの孤雁ヒトツか
標名もあふる恨もはく
板鼻のけりも杉を伐出す
菟弱のさしあふ流る世を
搦り腮もさるる扇の夫
山 雨 彦 塘 光 月

馬場流の遊もかきぬきつはよ 月
むすまのほを疑ふ 光
一歩入る絨布を首よかきぬき 表
雪車の難所よ瘦る疑と子 塘
左麻子千代能く音流く玉 山
月のをらぬをせし十六夜 雨
直くく音る年子かきぬきてる 光
浮巢流くく帳をかきぬき 月

小具足もくくおろき端魔坐 塘
西果之ろの傍もく 表
屋根青のほん出た聲く雪とく 雨
河も秋音のろわくく 山
柄杓くくむ井の花の下 月
莖くく村の田舎子もよ 光

こハ之縁の調
原川集の骨作り

苗代の夜多朝水親の多気 金令

曆子にふたを敷る小敷 さくら雄

切は巾の霞の細や尋ぬる人 暁河

卯の花蒼心月さかよまらさ 志ら男

彼も免て麻子嘯る夕つけみ 美山

傘持たるのうき道引を執 久磨

筆 狩の獲をさしあはす切て 雄
眠のあをさしあはすめす安 令
舟屋を惜みの差を捨てゆき 獲物
秋の管此より魚まつ 山
先ちもこの室のちる果乃ち後あはむ 男
新酒をうむ 優待の寒く 河
常矢射る場めふらむ 月あき 磨
高以銀管く 木免く 物

くろく魚はくすきぬまはく井竹 令
神のかさみの 鏡つら 雄
蒲巻着て寝くを花の 東山 山
木履あきききゆるいと 地 男
かさか焚火の志く 田塚 亮 河
寐釈せのちか引付て来る 磨
仁宗次の子も仁宗は呼ぶまで 物
くらく 畑の 鍵を 取らる 令

班鳩のいくまも鳴きてる
歩踏越る 兎の口の道路
指鳥の何をつよかくまを子夏
魚鬘散のむ 魚の律義さ
大津路をさまく 巻て春好
祭ははかく箱崎の舟
一巻のうさめこのかる常のそ
かろくもちる 刈萱の花
旗 令 物 磨 河 男 山 旌

あつたてゑもさる苗主居坊
湖の湧く年代記よむ
比とて母ぬ等のたつたこのも
鶯の下葉の 湧くえるも
さく花ははとをういすまをりき
てふの羽をさうけぬ 杯
執 筆 河 磨 物 男 山

吉ハハム庫ニ煙リ
風骨

梅の柳も雪は且去	金令
死の跡を小やま	杜英
菟の足も去るらん	双湖
秋の葉も去るらん	令
馬の心も去るらん	英
鳴るやうに去るらん	湖

西急雨の比ち笠くくもや形
窓く高砂摩耶く言くゆ
猿免のそ羽く葉を推く牛
斐電まうつ無き木ハ何きうこれ
却外を越く糸ハ水く如
入さの月乃はよまら 恋
曾らよけおまゆの裕くも思きよ
浩く整見かそ杜のいと抱
英 令 湖 英 令 湖 英 令

鶴の青をこ失て尺八の巻をたて
とこ食仕そめる 花の暮り樂
糸のこゆるをよ藤の葉くもそ
春のはさみをもいゆる 涼解
壺其至よ盆深る 座も松く
おきの明くよ 汗す 短冊
笑思く妻のんろくさく
心かしく園を 飾るくも
英 令 湖 英 令 湖 英 令

上

折くちの氷のうらみする英
十度の赤編をそくか雪
草鞋をうけて走るは鶴
羽織割を甲斐の徒
朝六のふか飯をすりぬ也
ぬきそまはたかおまへ
稲のうた知ぬや後よ方よ
峠の流る火の雪くり遺

魚のうらみは鶴まきる琉球船
亀かくこまは夏うけし
まうらんの軒をたてる昌蒲草
ふとくま来る三井の腕
足の指はゆるまの飾を
物語は芽をこしそ後よ三獻

世のふりしるや

尾張ぶし 菊とて

くらくろ	花	も	ま	白	よ	ま	あ	ら	卓	光
早	く	あ	ら	し	る	め	し	梅	花	托
葉	香	の	城	を	こ	ま	り	見	る	名
白	燿	の	流	る	葩	華	の	お	正	陶
春	風	の	お	ほ	し	花	の	う	さ	菊
花	走	り	勢	し	並	ふ	橋	の	木	鳩

是(是) 紫(紫) 寺(寺) の 躍(躍) を 持(持) てる
 鶯(鶯) 煮(煮) る 釜(釜) の 舌(舌) け の 家(家)
 鶯(鶯) と しの ぶ け ぬ ぬ なる 百(百) 十(十)
 美(美) 濃(濃) 時(時) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 魚(魚)
 出(出) 女(女) の お ぎ ぎ 後(後) も お 以(以) 其(其) 々(々)
 さ(さ) ぐ ぶ 能(能) 羨(羨) を う へ ぬ 心(心) 夏(夏)
 海(海) 門(門) 々(々) の 海(海) 又(又) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々)
 紫(紫) 々(々) 々(々) 足(足) を 洗(洗) ぶ 泉(泉) 々(々)
 鶯(鶯) 凌(凌)

は(は) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 村(村)
 酒(酒) の さ ぐ ぬ ぐ 春(春) 々(々) の 々(々) 々(々) 撰(撰)
 宗(宗) 鑑(鑑) の 心(心) 々(々) 々(々) 々(々) 月(月) 々(々) 々(々)
 け(け) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 子(子) の 袖(袖) 々(々) 々(々) 々(々)
 々(々) 々(々) の 又(又) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 撰(撰)
 鶯(鶯) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 撰(撰)
 鬼(鬼) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 撰(撰)
 市(市) 々(々) 々(々) の ね(ね) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 々(々) 撰(撰)

河もも利はまきと経比丘危 凌
 有城まきく小文庫まきる 冬
 水剪まきまきの結ぬ歩ま挽 塙
 婦まきまきする妹の時豆 五鹿
 秋風の扇、まきまきまきまき 矢
 亦まきまきの日の明く 春
 毎定河の芦笛の中まきまき 光
 小河まきの舟の結まきまき 里

日まきまきの夏まきまきまき
 か 後のまきをまきまき
 矢中まきをまきまきまき
 酒まきまきまきまきまき
 花のまきまきまきまき
 まきのまきまきまきまき

ま懐ふかよひに附乳の氣教を
おほよそ人の面影のこゝろ
さか文を續ぐ質をさかしく
及まをたぐひたりて大澤に
みやわんそくく古家の調の
平易に甲信をそまき
ひとと付乳にそまき
まぬふ面を一ちりこ

負外羊歌仙

菴も空ふ	偶之味	あまゆ	金令
井一	半面	ふハツ	虚舟
烏棚	多を	そま	軽舟
七夕	る	をか	獲物
こ	形	屋の	虚
庭	の	這入	
も	け	も	
空	の	海	
は	な	る	
今			

糸瘦にさしひの記の因雨に
妻か——鳩の雪をたすくむ
壁ぬきの翌能仕上も付はる
紫山——鞠の後比——
推の紫の麦の雪——を蓋つて守
雨をせしする布衣の下村
掉し麻の月の途は来て鳴る
ささく知くく祥指う秋
物 虚 物 虚 物 虚 物 物 物 物 物

赤多物よる振息の葉に
小工面うもつ字活の葉畑
常もゆきうと花をま川あふ
春よりとゆる夜寝の神
物 虚 物 虚 物 虚 物 物 物 物 物

春

月の暈めすよはけさむじのり

荒井

瀾 吾

ふさの宿や露ふむる夜露

三河

楳 光

あゝかたぬさるゝ鹿の角

半 光

土筆のうらゝあゝぬるゝる

伊勢

宗 悟

産りやものらにこたす

大津

宇 洋

雫のきよさかゝる椿うね

守 三

鏡ハ上野唐のふもや中流

本 光

うら葉しきよらの何いそく 辰花 長翁

あつら暖乎日はうらや 菱心 魯隱

月花の基をくし 鶯のうらや 米彦

清雪の押をうけける 牡丹がさ 雪智

ちきくそぬむ 牡丹を以て 菘 菘三

枕のふかきをまぬ 枝阿まき 井眉

そる 秋のつる花 流生の雪のほろ 早禰

うらうらきの秋のあまの 水元ワの葉吹 流生 李長

障あり芥の芽をあらゆ 柳 芽 凡十

かいら葉きく 藤元らや 花の晴 紀前 け先

人目かき 夜もあつらき 山さくら 上野 壺羊

そつそふ 及ておどりや 本芽ふく 鶯因

玉味障りの本芽 七日は 物 粟子の系 何兮

さつらや 霞のほろろろ 鶯の狂 隆興 多代女

春のうら 松ありき人 流きりり 松お 谷雄

左のり 片 新あまの 料くく 松お 布席

梅子ハ口をくらく 杉子と 妻めを 江戸 梅壽

錢別

初冬もさきと 秋の 杖子笠 玉色
苗代は 菊よ 鳩の 日比く 船 荷乙
そまき 草かる 子の 縁折て 澤至

夏

あつたつた 宵五月の月夜さ 一蕙
一あつたの 朝の 花をく 平雲

あつたつた 雨夜の月の 至とさ 確令

小より 涼さつた 本職さ 草か 雨巻

待よ 水鏡よ 雨の ときを 物吉系花女 今見

うの 花よ 咲く 花 水戸 豊と云

葉を 花よ 咲く 花 安房 素共

花を 花よ 咲く 花 下聖 素共

花を 花よ 咲く 花 上中 素共

花を 花よ 咲く 花 川二

好ましくゆくゆめいと人母の寝 庶大

雲幸や妻のそと種の新志あり 雨考

とらふ人はたては曇り 土の軒 結

物ぬぬ扇くうつをなが 具成

細舟はまをさるるぬ物来下署 賃僕

すしはたやふきのあつは夏のあは 定雅

門先のくぬき 杜の 武陵

用のあふやうやもあふ鳴 鳥 魏道

うさ雨のけいふらう 時香 二風

浦のさすはるかふもこ人あはれ 三省

面しらりのさ言えらうするおとを 可盈

ふらわの月や夜をさき 猿のうへ 花陶

昔爾を麻の中へ 萱うさ 臣溪

ふ葉の木のあふあふさうふさ 荳君

ぬきまのあふさるるワの葉さ 巨海

くさきうらふさるる積ぬ 宗古

むる白子息以ける本修が 典路

恒牛一月うきんまううこく也 李东

其くさす通くくやさきるの部 大巢

ほろくさすまして増えさうきる 秋拳

酒のゆる日ハ白くもぬ鹿もみ 三津人

日中の口のくくゆる清水くぬ 魚眼

むやしくも深起きくくくや先子 寄樹

川道途

きくむむやも鶴もきくぬ小海路 萬和

秋

かく藤くおとろき今ぬ山のうへ 岳轄

鞍 素子西氏おとろくやもくくる 中江先

稲妻あや羽三の佛のゆき比米 系竟

森子くや出くかきむ指のも能 東陽

野うらまらるる水まらるる林の風 路郭

名月く茶すまきくきありの月 卓池

於鷲の氣ようつるや秋のる 流芝
 去るあまぬきものや牛の角 南光
 切えく即ち萩の家のうち 踏莖
 矢月の書ありきりつらき 上忍 蘿月
 三井の種むらさきや小菘 咲 明良
 萩の傍しきまの草花とちひたり ちひれ
 萩のわが秋の草花を忍のこ草 ちきり
 藤のつらやせも柱まきのむ家 南部 東芽

藤のつらやせも柱まきのむ家 伊勢 推己
 花の矢の何れもまきとちひたり 伊勢 推己
 世の中しれくすくはあるに葉も 翠川
 九月もさそ目出こし 葉花 昌作
 去つるまは萩のつらきとちひたり 野渡
 山鏡のるもまきり 萩の風 也六
 朝鳥の種もる萩の月もさ 孔阜
 ゆく萩や習ふはさきとちひたり 近江 千當

幕子こもくやねのうらうら
汲波

白川の本はるをうて花の影
千影

叔母や山池のときらる起る
杜若

鶯のうけのこもる成るけり
乙音

月まじり雪ふりかへぬ
毛筆

はるこく水はるる月あふ
萬籟

肉をそひるる紫苑
芙蓉

月をそるるあふ梅の香
梅價

月の雪がけしと新雪色は
雪雄

よきるるふ菜のきく山家の
釣翁

舟の月掉東をよ南きよ
月居

冬

おこ山がかる日新や大根魚
蒼胤

ち雪やえんやあふ鮫の白
木海

枕もあふぬ木魚やあふ花
百池

鷹の餅はるるあふ菜は喉
金菜

大波うやうや来るそよ風子る、
管鳥

舟も心そよを流して枯る柳、
斗久糸

立浪の果を管夜の時る、
申翁

一時もあらぬ夕日の松木山、
志う女

逢板舟は葉葉うらな家斗、
烏頂

一町のさくや湖水のきくか、
古猿

志くもうら大さく成男松のる、
還古

一偶いふ草よさぬやいさり松、
野揚

大おれとちて何う候や舟のち、
未程

葉のせよあれをいさりの朝日、
尺艾

一雲さく輝くもる志くれを、
ろ路

ちのちあや枯るる葉の一掃、
扇暑

ち届はきれて何れか事の山の狩系、
吳光

旅人よおれはくくもさこの雪、
緩駕

ち程あきめつしや初時る、
逸人

ふらつむやせいの下越る水の音、
流其

小鳥賣る者ありきしりり種はる 伝巻 毎牛

塗きくこの電焚くくくく 伝巻 丹霞

川上の大根葉信牛多きう然 湛石

穀下ゆ本歌原の弓子鳴多き 上巻 椿堂

善きくく次舟中へ来きくくく 武巻 音人

冬ふれもきくく小舟の彩武巻 白度

怒り響ゆ水きくく小舟新巻 彩巻 江川

土屋きくく浮葉くくく 傳 里雪

くくく 上巻 茅磨

串くく 江戸 啓山

庚申の夜きくく 白石 乙二

追加

新白つを蔭ゆ 常陸 李尺

ゆつ 上巻 呼牛

小舟瓶よ水 安房 簾丸

初冬 其文

夜をよむ舟よりかゝ船の中 越后 此江

いよしのきくは 大安寺 東崇

多勢よ、是よりやうと 芦屋釜、 殊帆

もれおとさふれをてらや 松屋系、 蓮社

おとろくお中流なたる、 蛇の草 仙田 二川

